27　多紀元堅手校『鼎彫銅人腧穴鍼灸図経』について

宮川　隆弘
日本鍼灸研究会

『銅人腧穴鍼灸図経』（以下「『銅人』」）の江戸期刊本は，承応三年（1654）上村次郎右衛門刊行の『鼎彫銅人腧穴鍼灸図経』四巻（以下「承応本」）のみである．国立公文書館内閣文庫に，これと諸本との校語を記した文化7年（1810）年の多紀元堅書き入れ本（函架番号：304–243）が所蔵されているので，その内容を報告する．

承応本は，冒頭に「大明正統八年三月二十一日」の日付を持つ「御製銅人腧穴鍼灸図経序」が置かれ，巻一冒頭にのみ「錦城　紹錦　徐三友　校正」「書林　雲斎　鄭世魁　繡梓」として校正者と出版者が記され，巻四末の刊記に「万暦壬寅冬月書林」とあるから，万暦三十年（1602）の明版の重刻と推定される．この万暦三十年刊本は，早稲田大学図書館所蔵『聿修堂蔵書目』（函架番号：ya09-00910）の明堂経脈の項に見える「鼎彫銅人腧穴鍼灸図経四巻（一冊　徐三友校刊本）」がこれにあたるが，現在その所在は未詳である．ちなみに内閣文庫所蔵『聿修堂蔵書録』（函架番号：219-169）の鍼灸の項に著録される「四冊万暦壬寅重刊徐三友校本」は，前掲『聿修堂蔵書目』に「四冊　徐三友校本承応甲午重刊」とあるものと同一で，これが多紀元堅が書き入れを行った承応本と見られる．この多紀氏が著録した徐三友校刊本は，『中国中医古籍総目』所載の明版三種との関係は不明であるが，内閣文庫所蔵の明刻本（函架番号：304-240．以下「明刻本」）と比較すると，巻一や巻末の刊記は見られず，各巻の配列にも異同があるものの，図や本文の内容は基本的に一致する．なおこの明刻本と『続修四庫全書』995冊所収の明刻本とは版式も内容も異なる．御製序があることから，明代正統拓本（宮内庁書陵部所蔵：函架番号558-26，蓬左文庫所蔵：函架番号63-46，以下「拓本」）と系統を一にする（明刻本も同系統である）．巻上冒頭部分の内容構成は「黄帝内経」からの引用，「周身寸屈指量法図」「周身寸伸指量法図」「仰人尺寸之図」「伏人尺寸之図」「正人臓図」「伏人臓図」の6図，『十四経発揮』所載の十四経図14図と続き，最後に「取膏肓穴法図像此即釣股図法」と「崔氏四花穴図」が置かれているが，これらは拓本とは異なるものの，明刻本には同じ構成が見られる．なお『続修四庫全書』所収本は，金大定刊本所載の3図を載せるのみである．

多紀元堅の校勘は，主に3種の版本（金大定刊本，拓本，朝鮮刊本）を用いて，校語を朱墨で書き入れている．例を挙げると，巻一「十二経脈気穴経絡図」の手少陰之脈の流注について，「行以下朝鮮本無七字」として朝鮮版には欠字があることを指摘している．また，手太陽之脈の是動病では，「液，大定本作膿，朝鮮本作頬，並非」として対校本の誤字を指摘している．凶会の経穴部位「在上星後一寸五分」の「五分」に対しては「大定本，正統石本，朝鮮本，並無」との校語がある．正営穴は承応本では主治症を欠き，代わりに「此処遺漏，不敢妄増」との細字双行注があるが，これを拓本及び明刻本と照合すると，いずれも判読不可能である．（ただし『続修四庫全書』所収の明刊本には主治が見られる）これに対して多紀元堅書き入れ本の校語には，「治牙歯痛，唇吻急強，歯齲痛，頭項偏痛．鍼入三分．可灸五壮．」「依大定本，朝鮮本録補」とある．これは，拓本の不全や，対校本としての金大定本及び朝鮮版の価値を示すものである．なお第四冊の「兪穴都数」の部分は，金大定本及び朝鮮本には含まれていないため，拓本及び『霊枢』骨度篇などにより校勘を行っている．

多紀元堅書き入れ本には，4種の版本の内容が網羅されており，『銅人』検討の貴重な資料である．